

史林

第參卷 第參號

大正七年七月一日發行

(通卷第十一號)

研 究

秦邊紀略の嘎爾旦傳

文學博士 内藤虎次郎

一、緒 言

秦邊紀略一書は其の著者が既に一種の跡弛不羈の士なると共に、其の書中の嘎爾旦傳は又清の聖祖と一時覇を湖漠に争ひし厄魯特の英雄が半生を記述したる正確なる史料たるに於て、尤も興味ある者なり。然るに此書は其の板本の流布已に甚だ

罕にして、而かも板本には其の最も重要な嘎爾旦傳を逸したれば、此の珍らしき史料も、學者の眼に觸れずして、全く湮沒せんとし、余が知る所にては、此書の原因本たる寫本に就て、注意せるは、獨り現今支那の碩學たる沈子培氏あるのみなり。且つ其の著者の氏名も、僅かに陳廉祺の郎潛

三筆に出でしのみにて、其の人と爲りの如きは、殆ど世に知られず。隨て著述の年代、内容の價直に就ても、未だ研究せられしことあらず。一代の奇士が志望全く敗れし餘りに、心血を灑ぎて著作せし奇書も、空しく蠹殘に附せられんとするを悲しむ、聊か此書並に著者に就て、余が考へ得たる所を述べ、併せて朔漠の英雄が傳記に就て、從來の史籍に載せたる敘述の精粗をも論證せんとする。

二、秦邊紀畧の著者

此書に關する郎潛三筆の記事は左の如し。
顧處士所著讀史方輿紀要。博聞宏辨、囊括古今。寧都魏禧叔子稱爲數千百年絕無僅有之業。江夏劉湘燿者。嘗校顧書十餘年。愛其精博。而微疵其縱橫。著讀史方輿紀要訂若干卷。禧弟子梁份嘗著秦邊紀畧。有書無圖。湘燿得圖以校梁書。
宛合。知即份舊本。顧與處士書頗齟齬。湘燿因合訂爲秦邊紀畧異同攷。士人秉兼人之才。窮老

盡氣。顧精一書。終不能免後世之訾議。著作之事。眞非易言。按份傳稱學不仕。爲西邊大帥上客。其書僅存。湘燿交梁梅文鼎。以諸生終。所

著書多零落。均可憫也。

元來陳氏の郎潛紀聞は、前人の著書より抄録したる材料多ければ、此項も何か據る所あらんと思へども、今之を知るに縁なきを遺憾とす。此の紀事は其の書の價直を認めたる點に於て、劉湘燿に據りしとはいへ、十分の稱揚を爲したるものと謂ふべし。何となれば、顧祖禹の方輿紀要是支那に於ける地理に關する著書中、不朽の盛業として推稱せらるる所の者にして、單に、甘肅西邊の一部分を記述したる秦邊紀畧にして、之と比並せらるるは、名譽と謂ふべければなり。且つ二書の異同を校したる劉湘燿も亦一時の奇士にして、尋常の書を讀むことを屑しとせず、古今の孤詣絶學を求め顧炎武、梅文鼎等の書を喜び、六書世臣説を作りて、其の尊崇する所を示せり。六書とは日知錄

顧炎武の著、通雅、方以智の著、曆法明の朱仲樞の撰せる、天學會通の薛鳳辭の著、折衷歷法を指すか。

方輿紀要の著、顧祖禹の著、歷算叢書、梅文鼎の著にして孫梅穀成の改編せし者なり、遂に

業を梅文鼎の門に受け、痾獲する所多かりしが、大將軍年羹堯に知られて、其の幕客たりしも、年が驕悖にして必ず身家を敗らんとを知りて辭し去りたり。其の著書は傳はらざれば、秦邊紀略と方輿紀要との異同に就ても、如何の所見ありしかは詳かならず。但だ之によりて此書が已に當時の奇士に知られたりしを見るべきのみ。

尤も秦邊紀略の著者の知己として、已に其の同時に劉繼莊名は獻廷の如き有名の學者ありき。

劉獻廷は清初に於て、心を前明に存せし幾多の學者中、若し風雲の會さへ許さば、大事を擧げん企望ありし疑ある一人にて、顏習齋、王崑繩等と趨嚮を同じうせり。されば其の新朝に仕へずして身を没したるは、黃宗羲、顧炎武、王夫之、萬斯同、顧祖禹、黃儀等と等しけれども、單に樸學の

徒と目すべき者にあらずして、頗る危險なる人物なり。全祖望の撰せる劉の傳によれば、梁質人、

王崑繩を稱して劉の同志と爲し、王崑繩が撰せる劉の墓表にも、知己を以て相許せること見たり。

質人とは份の字なり。然るに劉の著せる廣陽雜記によれば、梁份は康熙年間、吳三桂が叛いて湖南に據りし時、江西の吉安に據りて、清軍を防ぎし韓大任の爲に、援兵を吳三桂に乞ふ使命を帯び、親しく吳軍と清軍との接戦を目撃せるが若し。雜記に云く

吳三桂據湖南。兵駐松滋久。乙丙之間。和碩安

親王統大兵。自江西袁州直趨湖南。兵至長沙之

東。三桂聞穆將軍爲戰將。不敢輕敵。丙子二月。

自松滋退軍長沙距戰。梁質人自江西爲韓非有求

援。三桂之意。先敗安王而後援吉安。訂於三月初

一日合圍。留質人曰。汝於壁上觀吾軍容。歸以

語東方諸豪傑也。官山在長沙東。南與瀏陽相值。

安親王軍長沙東官山之後。三桂軍長沙西。連營岳麓山。亘數十里。軍容之盛近古未有也。三桂欲自與安親王決戰。諸將苦諫而止。皆誓死以戰。三桂坐瀏陽門樓。質人以三桂命立城上。安親王發兵十九路。自城北鐵佛寺後。布陣至城之西南。長數十里。三桂亦發兵十九路以應之。將軍王緒先陷陣。清兵合圍之數重。旂幟盡偃。金鼓無聲。城上人盡失色。以爲此軍全沒矣。少頃聞交鎗連發如急鼓。清兵紛々墮騎。王緒軍衝突無前。莫有櫻其鋒者。深入敵境。獲全勝而返。僞將軍吳應貴者三桂之姪也。搏戰爲流矢所中。貫顛墮馬。夏國相力戰救之而歸。穆將軍追至城下。三桂于近城設伏以防。巨象伏岡下。敵至。起而衝之。清兵披靡而走。交鋒者凡三路。馮寶軍大捷。餘殺傷略相當。呼聲動天地。血戰至日中。天忽大雨。交鎗不得開。各斂軍而退。三桂初意氣吞官山。先發十九路。餘軍駐岳麓。留爲更番地。不

勝則後軍繼之。必平官山而後已。及見應貴傷。復值大雨。爲之奪氣。曰天意不測。遂入城而守。清兵亦掘濠不復出。未幾應貴死。

乙丙は乙卯丙辰にして、即ち康熙十四十五兩年に當る、故に其の丙子二月とあるは丙辰の訛りなり此外廣陽雜記には梁份に關する記事數條あれども其の著書に關する者は只一條なり。曰く

梁質人留心邊事已久。遼人王定山諱燕贊爲河西靖逆侯張勇中軍。與質老相與甚深。質人因之徧歷河西地。河西番夷雜沓。靖逆以足病。諸事皆中軍主之。故得悉其山川險要部落遊牧。暨其強弱多寡離合之情。皆洞如觀火矣。著爲一書。凡數十卷。曰西陲今略。歷六年之久。寒暑無間。其書始成。前在都中。余見其稿。果有用之奇書也。方輿之學。自有專家。近時若顧炎范之方輿紀要。亦爲千古絕作。然詳于古。而略于今。以之讀史。固大資識力。而求今日之情形。尙須歷

鍊也。此書雖止西北一隅。然今日之要務。孰有

已成全璧。樂何如之。云々。

更于過此者。在都門忽忽袞袞。無片刻之暇。不得
錄一通爲恨。蓋其書規模雖定。尙未脫稿。塗乙
改竄滿紙。須余自錄。不可假手他人也。地北天
南。會合莫必。每與宗夏言而恨之。壬申之春。

とあり。此條記す所によれば、劉獻廷が此書を寫
録せるは、辛未の歲、即ち康熙三十年に在るが如
し。但し此記事中、壬申と辛未と前後せるは疑ふ
べきも、或は傳抄の訛に出でたるならん。而して
其書は又西陲今畧の別名あるが如し。意ふに其の
著書の年月も、略ぼ推定し得べし。王崑繩が撰せ
る劉の墓表によれば、

余與質人。遇于星沙狹路。相逢而其書在篋。別
來一載有半。質人亦鹿鹿道途。未嘗改訂一字。

留京師四年。有奇遇而訖不見用。庚午復至吳。

此一願。則河西五郡。即爲我囊中物矣。書凡五

とあり、又雜記中に其の丁卯入都の事を記せるを
見る、丁卯は即ち康熙二十六年なれば獻廷が始め

撮其綱要。然不敢太略。亦不下四百餘紙。乃縮

て其書を都中に見たるは、蓋し亦康熙二十六年
頃に在りしなるべし。靖逆侯張勇が死は康熙二十

爲蠅頭小草。草草成形。一紙可括其三四紙。不

三年に在りて、梁份が河西に在りし六年間は、其
の晩年なるべく、二十三年より六年溯れば、梁の

過百餘紙耳。遂奮然下筆。與日競先。後夜焚膏

以繼之。經始于辛未二月初一日。至二十二日。

近疆夷地。暨諸夷小傳。皆錄畢矣。尙有一冊。
乃西域諸遠國。及籌邊方略。皆質人未定稿也。

始めて河西に至りしは、康熙十七八年の間に在る
べし。康熙十七年には吳三桂既に死して、西南の

事、復爲すべからざるに至りたれば、梁份は其の雄圖を擲つて、邊疆に餘生を送ることとなりしならんか。張勇は當時の名將にして、趙良棟、王進寶と三人並びに三藩の亂の大功勞者なるが、其の幕中には往々跡弛不羈の士ありしこと、廣陽雜記に載せたる蔡世科等の如きを見ても知るべし。以上の事實を綜合すれば、著書の年代は康熙十七八年より二十三年間に在ること疑なし。即ち梁份の一生を概括すれば、少くして魏叔子の門に入り中年韓大任の軍に従つて、清朝反對の擧に力を盡せしが、晩年専ら意を邊事に留めて著述を以て自ら表見せし者なり。

然るに余が藏せる寫本に、何人の記せる所なりやを知らざるも、此書を以て江右の黃君其の名氏を忘れたりの集むる所とし、黃は久しく秦督佛公の幕府に居り、輿圖邊報、番土彝情を熟識し、猶ほ秦督に請ひ、身親ら閱歷して、彙めて是書を成すことを

言ひ、劉獻廷は己亥の歲、此書を祝棠村に示し、姜子發見て之を録せりとあり。佛公は佛掄のことなるべければ、其川陝總督に任せられたるは、康熙三十一年壬申に在りて、己亥は乙亥の訛と見るべく、姜子發の名も亦廣陽雜記中に疊見せるを考ふるに、此説の由來する所も亦據なきにあらず。但だ其の著者の梁份たることは、疑ふべき餘地なければ、此説あるによりて之を動かすべきにあらざるなり。印本叙には撰者の主名を攷ふる能はずといひ、而かも其の紀年乾隆に及ぶを以て、作者を其時代の人ならんと推定せるは誤れり。蓋し乾隆に及ぶ紀年は、後人の竄入なることを思はざるなり。按ずるに劉獻廷の高弟黃宗夏あり、劉の學術は黃之傳へたれば、或は此書の流布も黃の手より出て、遂に誤せしにあらざるか。

三、秦邊紀略の内容及異本

秦邊紀略は其の名稱の如く甘肅の邊疆、即ち河西各郡の建置始末、及び形勝を敘述せる者にして

印本に見ゆる吳坤修の序に、每條府衛を以て綱と爲し、山川城堡官司戎伍、其下に伴繫し、道里程站、正たり間たるも、即ち一墩一塢も、必ず詳かに之を著はし、未だ身其地を履まざる者と雖、籍を按じて稽れば、瞭瞭として掌紋を數ふるが如し其の叙述の該贍知るべしといへるが如く、一地方の志乗としては其の能事を極めたる者なり。然るに印本と寫本とは、其記事の次序、甚だしき相違あり。其書には元來目次なきも、今試みに目次を製して、印本の目次を上層に列し寫本の目次を下層に列して、之を對照すること左の如し。

印本目次

寫本目次

卷一

卷一

- 全秦邊衛
- 河州
- 西寧衛
- 西寧邊堡
- 西寧近邊
- 此章錯簡あり
- 莊浪衛
- 涼州衛

第三卷 研究 秦邊紀畧の噸爾且傳

莊浪衛

莊浪南邊

莊浪北邊

莊浪近疆

卷二

涼州衛

涼州南邊

涼州北邊

涼州北邊近疆

涼州近疆

卷三

甘州衛

甘州南邊

甘州北邊

甘州北邊近疆

甘州近疆

卷四

肅州衛

肅州南邊

甘州衛

肅州衛

靖遠衛

寧夏衛

延綏衛

卷二

西寧邊堡

莊浪南邊

莊浪北邊

涼南邊堡

涼州北邊

甘州南邊

甘州北邊

肅州南邊

肅州北邊

靖魯邊堡

寧夏邊堡

延綏邊堡

卷三

第三號

七(三四九)

此章は靖簡なり今意を以て正す甘州北邊一章も亦然り

卷 四

肅州北邊

莊浪近疆(原本標題なし今意を以て之補ふ)

靖遠衛

涼州近疆(同上)

靖虜邊堡

涼州北邊近疆(同上)

卷 五

甘州近疆(同上)

寧夏衛

甘州北邊近疆(同上)

寧夏邊堡

肅州近疆(同上)

寧夏近疆

附嘉峪關外至哈密路程

延綏衛

寧夏近疆(同) 以上數字錯簡あり意を以て正す

延綏邊堡

河 套

卷 六

河 套

卷 五

外 疆

外 疆

嘉峪關至哈密路程

近疆西疆傳

近疆西夷傳

河套部落原本云當附在河套之后

河套部落

附蒙古四十八部落考略

附蒙古四十八部落考略
西域土地人物略

曠爾且列傳

此の如く參差として、殆ど孰れが是なるを知るに苦しむ。然るに劉繼莊が此書の内容を概説するに始而九衛大局已定。繼而邊堡。内地已周。終而邊疆諸夷。全書已竟。

といひ、又書凡五冊といふを見れば、寫本を以て原書の體制に近しと斷すべきに似たり。所謂九衛とは即ち寫本第一卷に收めたる河州より延綏衛に至る九章を指すべく、繼而邊堡とは第二卷の收むる所全部を指し、邊疆諸夷とは第三四五各卷に收めたる各章を言ふ者なるべし。余が藏せる寫本にも頗る訛脱多きも、其の寧字は皆甯に作らず、夷字は皆彝字に作るより推せば、乾隆初年を下らざるに似たり。

印本と寫本との最大相違は、最後の一章に在り但だ印本に收むる西域土地人物略は、已に顧炎武の天下郡國利病書卷一百にも收載し、又余が記憶する所によれば、清の内閣舊藏書中明治四十三年中調査せる者廿

肅鎮戰守圖畧といへる一抄本ありて、其圖說中の年號は嘉靖八年に至り、表紙裏に用ゐたる文書には嘉靖二十三年のものありしが、其書末に西域土地人物略、及び西域沿革略の二篇を載せ、前者は亦天下郡國利病書に收むる所と同一の者なりき。

されば西域土地人物略は明代より已に存せし者にて、梁份の撰著にあらざることを明白に、秦邊紀略の原書は、嘎爾旦傳を以て終りしを、後人が其の清朝の敵たる人物を記して、之に與へたる辭多きを忘み、之を刪り去るに當り、妄りに前人の撰著を取て之に代へたる者ならん。此は印本の最も劣れる處なり。

秦邊紀略に收めたる近疆西夷傳、其他の記事中、厄魯特部落に關する者は、多く史料たる價直ある者なれども、そは皆異日の研究に譲り、専ら嘎爾旦傳に就て、少しく所見を述べんとす。

四、嘎爾旦傳の研究

嘎爾旦の事蹟を記せる書、余が目睹せる者は魏源の聖武記、趙翼の皇朝武功紀盛、祁韻士の皇朝藩部要略等にして、康熙實錄は全く見るを得ざれば、東華錄によりて、其の一斑を知るのみ。然れども能く其の始終を綜べ、詳實を極めたるは平定朔漢方略を以て最とすべし。而して藩部要略の實實にして正確なるは、實に他の諸書に愈れり。西洋人の記する所は、余僅かにブルルジャー氏の支那史を見るを獲るのみ、蓋しブルルジャー氏の嘎爾旦に關する記事は、ジエヌイト宣教師等の記述に出でたるべきも、余は未だそれらの資料を獲るに至らず。此等の資料によりて、梁份の嘎爾旦傳に參稽するに、既に其の異同の少からざるを見、而して之によりて各資料の値直をも決することを得。但だ梁氏の嘎爾旦傳は、其の初年に詳かにして、未だ清朝と衝突せる中年以後の事に及ばず。故に其の勢力蒸蒸日上り、將さに全盛に

達せんとするの狀を叙して、少しも貶詞なし、是れ反つて其の清朝と抗爭して失敗せる後、あらゆる惡罵を蒙りて、一生を掩はれたる各資料に比して、一面の事實を傳ふる者と謂ふべし。因りて以下に其の本文を引き、他の資料によりて之を疏釋し、討讎し、以て一々其の異同を著さんとす。

噶爾且稱ト失可兔汗于西域者也。噶爾且亦作噶爾丹可汗之稱。

皇朝藩部要略卷九に曰く、初顧實汗卒。鄂齊爾圖嗣。爲衛拉特首。噶爾丹既戕鄂齊爾圖。自稱博碩克圖汗。因脅諸衛拉特奉其令。即此人なり。

其王大父曰脫穎台司。大父曰哈刺忽刺。父曰把都兒。世襲黃台吉。燕言王也

噶爾且の曾祖父及び祖父の名は、諸書皆見る所なり。藩部要略には巴圖爾璉台吉者名和多和沁。字罕十四世孫。特強悔諸衛拉特といひ

又姓綽羅斯といひ、平定朔漠方略には噶爾丹之父曰和多親。自號巴圖魯台吉。駐牧北方阿爾台之地。是之謂北厄魯特といへり。聖武記に綽羅斯牧伊犁といひ、又綽羅斯特則據伊犁。兼脅旁部。與喀爾喀鄰といふ者、亦皆把都兒の事を指すに似たり。

彝成權爲故元苗裔。世擁部落。土着金山。夷名阿爾太。譯者曰金嶺也。金山在沙陀馬東行六十日至肅州

此に元の苗裔といふは、成吉斯汗の子孫と爲す者なるべく、藩部要略に以て元の臣字罕の孫と爲す者と同じからず。

把都兒生六子。曰積欠。亦作曰卓羅火燒氣。曰把都兒司。曰宛冲。曰僧格。其幼則噶爾且。

藩部要略に曰く、初準噶爾巴圖爾璉台吉卒。子僧格嗣。其異母兄卓臣、及卓特巴巴圖爾與爭屬產。遂殺僧格。有噶爾丹者僧格同母弟也。車臣は即ち積欠、卓特巴巴圖爾は即ち把都兒

司なり。平定朔漠方略にも亦價格の異母兄車臣及巴圖爾以爭屬產與價格有隙、乘夜劫殺之。部内大亂と書せり。卓羅火燒氣は、藩部要略に卓特巴巴圖魯の弟卓哩克圖和碩齊とせり。宛冲が事は諸書に所見なし。

初嘎爾且母夢身毒僧言寄靈。及有身。多異徵。

金山時有五彩雲氣。把都兒喜。始寵其母。嘎爾且生而神異。

歲在己丑長喜奉釋氏。有大志。好立奇功。父母深愛之。欲立爲黃台吉。嘎爾且曰。阿哥在。乃盡髡其髮。獨身往烏思藏。東馳五六日。

黃衣僧十數輩迎而問曰。小阿哥豈嘎爾且耶。曰然。何從知。中有提短鎗者。顧而受鎗曰。此七

生舊物。今達賴喇嘛使見還。嘎爾且驚喜。亟下馬。拜而受之。遂偕往烏思藏。乃師事達賴喇嘛

之徒。徧西域。而特重嘎爾且。所語密。雖大寶法王。二寶法王。不得與聞。

按明時有大寶法王二寶法王于烏斯藏。皆給金佛。乃達賴喇嘛之徒。居烏斯藏日久。不甚學梵書。

唯取短鎗摩弄。黃衣僧常嘆息。西方回紇不奉佛教。護法如韋駄。僅行于三洲。嘎爾且笑曰。安知護法不生今日。

生時の神異を説くは、嘎爾且が四方に人望ありし時の記述なるが故なるべし。生年を己丑（順治六年）に在りとするは、朔漠方略の中年（蓋し甲申即ち順治元年）説と同じからず。顧

而受鎗は授鎗の訛なり。藩部要略に曰く、簡噶爾丹者。價格同母弟也。居唐古特。習沙門法。又朔漠方略に曰く、噶爾丹爲價格同母弟。時尙幼。棄家投達賴喇嘛。習沙門法。皆過有にして梁氏の傳の詳密なるが如き者あらず。烏思藏とは元明の時、西藏を指すの語、清人の衛藏と同一對音なり。

初哈賴忽喇娶後妻生子。曰七清。亦作乞慶獨有寵。欲立爲黃台吉。然把都兒長。久握兵。乃分所部屬七清。使居沙陀西徧。七清勇而善戰。捉野馬

如騎羊。彝威稱之爲篩漢。爲豎一拇指。篩漢華言
好漢。豎
梅指者。云第
一好漢也。不愛于昆弟。其天性則然。得引弓之
士萬餘。勢日張。哈賴忽喇死。把都兒襲。把都
兒死。長子集貝襲。未幾死。無子。以次傳僧格。
皆居金山。稱黃台吉。七清部落日多。親黨日甚。
稱爲黃台吉。僧格弗能禁。僧格同母獨嘎爾且。
旣以爲僧。益孤立無助。于是七清殺僧格。併其
衆。收其妻妾。釋黃台吉而稱汗。

藩部要略、朔漠方略、皆僧格を殺せる車臣を
以て、其の異母兄とす。然るに梁傳によれば
七清亦車臣と
同一對音は僧格の叔父にして異母兄にあら
ず。但だ梁傳も亦僧格の兄に積欠あることを
記せるより推すに、七清、積欠、叔姪同名な
るを以て、藩部要略、朔漠方略並びに此の錯
誤を致せるか。抑も積欠は或はこゝに出せる
把都兒の長子集貝の對音なるか。但梁傳前節
把都兒の子に集貝なし、意ふに集貝は集見の

訛なるべし。聖武記に白綽羅斯特渾台吉死。
子僧格立。僧格死。子索諾木阿拉布坦立。僧
格弟噶爾丹殺之。自立爲準噶爾汗。旋取青海
和碩特車臣汗女而襲殺車臣汗。とあるは、頗
る事實の前後を顛倒し且つ混同せり。プール
ジャーも亦噶爾且が西藏に赴く前に兄弟と爭
ひ、尋で兄僧格を殺したりとし、其の西藏に
赴きしは之が爲に逃走せしなりといへるは、
聖武記と同じき誤謬に陥いれり。

僧格妻名阿
奴慧而美。深愛噶爾且。使人懷袒服。間
至西域。即烏
斯藏噶爾且初微聞。遽入告達賴喇嘛。
下高樓。釋僧服。向金山去。噶爾且將行。達賴喇嘛多
秘語。臆拜別。口殺逃及
出也。汝乃初僧格遇害。部落有衆而結聚者百十騎。
屯大磧東。未知所附。久之。夜忽見火光千百遠
々從東方來。皆大驚。群起勒馬。持滿以待。比
至。則噶爾且手持一鎗。衆審視驚喜。下馬羅拜。
以爲神。噶爾且益集合燼餘。故部落聞噶爾且歸。

稍々集聚千餘騎。欲進。衆曰。兵寡地險。姑少留俟。噶爾且曰。進。汝第視吾鎗所向。衆皆曰。者。華言詳也進次金山。七清汗易之。率萬騎接戰。三分其軍。馳向東。塵霧障天日。噶爾且獨當先躍馬挺鎗。最深入。斬殺百十騎。潰其軍。身不著一矢。七清汗退金嶺口。嶺高轉石如雨下。噶爾且命更番仰攻。衆莫敢往。噶爾且立斬宰僧數人。狗于軍。身率二十騎先登。呼聲振天地。遇七清汗。入其軍手縛之。左右皆走散。莫敢當。皆大驚以爲神。棄弓矢。下馬芻拜降。噶爾且既伏金山。乃招徠歸附。禮謀臣。相土官。課耕牧。修明法令。信賞罰。治戰攻器械。

阿奴は有名なる婦人にして、噶爾且の可敦たり、後に昭莫多の戦に陣歿せし者なり。藩部要略には之を以て噶爾且が康熙十六年に殺せし和碩特の鄂齊爾圖汗の孫女なりとせり。噶爾且が勃興の時の事は、藩部要略に達賴喇嘛

遣歸轄厄魯特衆。因執車臣戕之。卓特巴巴圖爾與弟卓哩克圖和碩齊奔青海。噶爾丹遂爲所部長。といひ、朔漠方略に、達賴喇嘛遣噶爾丹歸。統其衆。噶爾丹性既狡黠。且險狠好鬪。外假達賴喇嘛爲援。內以結其父兄舊屬臣民。藉名報讐。殺車臣、巴圖爾。遂自襲爲台吉。肆其兇鋒。稍々蠶食西北諸部。漸至猖獗。といふに過ぎず。聖武記の若きは鄂齊爾圖汗の事と、車臣汗の事とを混同し、一も信を取るに足るものなし。ブルンジャーも噶爾且が兄を殺せるが爲に、達賴喇嘛に西藏の僧侶に列するの恩典を拒絶せられて、其の種族の幕營に歸り、達賴の宮殿に居りしとの風説により、罪惡を滅せる者として歓迎されたりといひ、又僧格の後で代り立ちし汗を黜け、其の一族を廢殺して、其の部族を服従せしめたりといへるは恐らく康熙帝と對抗せる當時、清廷に流布せ

られし惡評を傳聞せし宜教師の記述に據れる者ならん。只だ梁傳のみは其の英姿を叙して生氣あり、此の朔漠の豪傑に負かずと謂ふべく、加ふるに事實も亦やや誇張せられたる外甚しき誤謬なき者なるべし。

乃西據俄羅斯。徒國居之。因以俄羅斯名其國。

俄羅斯周城皆水。城有門四十。人皆回回。東南行十日。至金山。即唐書多羅斯。南至西州千五百里。泰西職方外紀有俄羅斯。俄亦俄也。多

梁傳の此段は誤れり。俄羅斯と多羅斯とを混同するが如きは、最も無稽の言たり。多羅斯は、即ち耶律楚材西游錄の塔刺思、劉郁西使記の塔刺寺なれば、本傳の俄羅斯は原と多羅斯に作るべかりしを、梁份が誤解よりして、強て俄羅斯に作りしならん。然るに聖武記に噶爾丹遂籍詞報復。揚言借俄羅斯兵且至。喀爾喀擲之無其事。守備懈。而噶爾丹言之不已といふを見れば、當時實に俄羅斯に關する訛

傳ありしが如し。蓋し此時、俄羅斯の黑龍江に於ける侵略は漸やく著るく、尼布楚條約未だ成らざるの際なれば、此の訛傳を起し易き事情の下に在りしなり。プールジャーの記する所によるも、噶爾且は清俄の葛藤を利用せんと務めたるが如く、又俄國より噶爾且に使者を送りしこともありといへり。

又併綽庫兔吳巴什萬餘騎。凡附七清汗者誅之無遺類。于是富庶甲于西域。而使命往來無虛日。

藩部要略に曰く、有楚琥爾烏巴什者、噶爾丹叔父也。子五。長巴哈班第。次阿南達。次羅卜藏呼圖克圖。次學章。次羅卜藏額璘沁。噶爾丹以私憾。襲殺巴哈班第。執楚琥爾烏巴什。及羅卜藏額璘沁等禁之云々。楚琥爾烏巴什は即ち綽庫兔吳巴什なり。朔漠方略には楚呼爾吳巴什に作る。

烏思藏時有黃衣僧來。人莫測其所以。噶爾且取

沙油汁成硫黃。取瀉鹵土煎硝。色白于雪。銅鉛
鑛鐵之屬。出地中。積岸產金珠。則屏而不用。

馬駿而蕃庶。四方莫或過之。諸夏飽以糈帛亦金幣
不能去。然不可無報德者。乃令一白吉出一馬。使者遂驅名馬
數百以歸。又與以織金大綉立綉刺繡諸彩色。噶爾且願指之曰節
諸器合聲曰節。噶爾且曰。我國獨少此。此中國物也。諸器咸
鑿摹之。蓋示以中國之美也。

資用極備。不取給遠方。乃悉巧思。精堅其器械。

作小連環瑣子甲。輕便如衣。射可穿則殺工匠。

又使回回教火器教戰。先鳥砲。次射。次擊刺。

令甲士持鳥砲短鎗。腰弓矢。佩刀。橐駝馱大砲。

出師則三分國中、相更番。遠近聞之咸懾服。

朔漢方略に康熙十八年、理藩院奏曰。噶爾丹

稱爲博碩克圖汗。遣使貢獻鎖子甲、鳥鎗、馬

駝貂皮等物、とあり、當時噶爾且が武備充實

せしことを見るべし。

是時諸夏有滇黔變。秦蜀間蜂起。噶爾且諸所向。

達賴喇嘛使高僧語之。曰非時非時。不可爲。噶

爾且乃止。其謀臣曰。立國有根本。攻取有先後。

不可紊也。李克用之先世。發跡金山。本根不立。

遂不能成大事。我太祖初興。滅國四十。奄有西

方。然後捉夏執金。混一稱尊。元太祖鐵木真稱成
吉思可汗事見宋史

爾且善其言。乃爲近攻計。西北鄰國。黃台吉有

六七部。盡擒其名王。收其兵。東則土魯番。哈

密諸國。盡蚕食之。所過無強敵堅城。

滇黔の變とは、即ち吳三桂の叛亂にして、秦

蜀間の蜂起は、王輔臣等の之に應じて兵を舉

げたるをいふ。朔漢方略によると、康熙十八

年七月甲辰。將軍張勇奏報。噶爾丹發兵侵土

魯番。張勇疏言。准提督孫思克移咨云。通丁

白金印。報稱噶爾丹委其屬下阿爾達爾和碩齊

等三頭目。領兵三萬。將侵土魯番。前哨已至

哈密云々。

又檄塞下諸彝。即今河西之
南北邊部落諸彝咸頓首稱臣。獻琛

恐後。後分命所親信居沿邊。即宛
卜等又使其黃台吉

居瓜沙二州間。索爾、王建兒、綽
力瓦合首氣等。使控各黃台吉。且

以調刺喀爾喇焉。喀爾喀在諸夏之北。蓋北極也。有七部。噶爾且一汗。曰土謝圖汗。曰七清汗。曰賽

應汗。曰車陳汗。曰札沙克圖汗。曰那木厄金汗。曰田圖極。皆得汗。其地方數千里。帶甲五六十萬。南至山西之大同。西距鞏離河。爾汗已久。且作賓中土。未嘗臣服于人。凡藝之在四者。中國目爲額爾德。在北者指爲喀爾喀。中國之外。唯一部爲大。若四十七族及河套。皆渺乎小矣。喀爾喀既富庶。多馬多皮革。往來大同府之口相貿易。亦貿易于陝西之靈夏市口。自噶爾且使人住牧瓜沙間。于是喀爾喀之人。無復至西靈市口矣。

朔漠方略に康熙十八年三月、喀爾喀畢馬拉吉

里第台吉の秦報内に滾布の名あり、即ち此書の宛下なるべく練力兔合首氣は即ち卓哩克圖和碩齊なるべし、索囊、王建兒は未だ考へず。額得忒即ち厄魯特なり。

東方既臣服。乃西擊回回。下數十城。回回有密受馬哈納非致者。馬哈納非。泰西以爲馬哈賦。初迎降。

雪夜襲擊之。殺傷至十餘萬。馬匹器械。

失亡無算。壬戌年。一入回回國。其國請降。納添巴。奉淨聖教。許之。飲兵入其城。夜半回回外援至。城中應之。內外合攻。火光燭天。噶爾且部落皆潰。是時噶爾且

坑斃。人馬陷不可勝。城中尾聲。死者無數。唯噶爾且躍馬持鎗。挺身去。回回割襟奏。馬哈納非天方國以爲聖人者。凱。有數駱駝。此下缺。

噶爾且喪師返國。未嘗挫銳氣。益徵兵訓練如初。

噶爾且敗歸。集未教之兵。勒新講之馬。試之。聞極西地有人。此間缺。而形如犬。能日馳數百里。其婦女絕美。乃携兵多。此間缺。騎馬直入其國。挾婦女。使人謂回回曰。汝不來降。則自今以往。歲用兵。夏蹂汝耕。秋燒汝稼。今我年未四十。迄至于髮白齒落而後止。城中人聞咸服栗。門嘗晝閉。其明年大破之。回回悉降。不敢復叛。

此の回回を伐つ一事は、支那の史書に全く見ざるのみならず、プールジャの記事も、更に之に及ばず、僅かに此の梁傳によりてかゝる事實ありしを知るのみ。其所謂回回は何の地方なるやを明記せざるも、意ふに俄羅斯地方に於ける出來事なるべし。

于是益強甚。兵之在俄羅斯與屯子金山者有五十

萬。屬國不與焉。噶爾且遣人至河內。河西陳兵五千使觀之。旗幟鮮麗。田曹刀戟之光燦日。且謂之曰。兵俱屯塞上。此出護身視軍耳。曰善。我聞疑兵太少也。日額魯何如。曰較此頗多。唯鎗吊彩繭等差不及耳。

こゝに俄羅斯といへるも、亦多羅斯として看

るべし。河西とは即ち張勇を指して言へる者にして、張勇が噶爾旦の使者に兵を觀せしなり。

西域既定。威願奉爲汗。噶爾旦乃請命達賴喇嘛。

始行ト失克兔汗事。西北諸國。唯喀爾喀爲大。

稱汗久。莫之與京。按汗自萬曆間。有察哈爾林丹汗。稱汗而已。至于四十七旗。不過稱王稱公稱貝勒而已。不敢與喀爾喀抗也。及噶爾旦盛。願亦視

北方。恥與並爲雄長。有遠攻之心。而日簡練部落。若將赴鬪者。其事多秘而不宣。喀爾喀于是

有戒心焉。西域窮髮之國。莫不奔命于俄羅斯。

日以益盛。或謂亦達賴喇嘛爲之期會云。

噶爾旦が博碩克圖汗と稱し、入貢せることは

、朔漠方略に於て之を康熙十八年九月戊戌の

下に載せ、訊之來使。言達賴喇嘛加噶爾丹台

吉以博碩克圖汗之號といへり。梁傳にては壬

戌即ち康熙二十一年に回回を撃て敗北し、明

年再び撃て之を破りし後とすれば、其の二十

二年ならざるべからず。但だ方略の記事は理藩院の奏疏によりたれば、誤りあるべしとも覺わす、豈に梁氏が記憶の誤りに出づる乎。

此傳によれば、秦邊紀略の成れるは、康熙二

十二年以後にして、二十七年噶爾旦が喀爾喀

を侵略する以前に在りしこと明白なり。意ふ

に梁份は張勇が二十三年に死せしを以て、其

の未定稿本を携へて、北京に赴きしなるべし。

梁份が噶爾旦傳はこゝに盡く。其史料としての價

直は以上の考證によりて、粗ぼ之を知るを得べく

、且著者は已に清朝に慊らざるを以て、其の敵たる

噶爾旦には、願る同情を有せるが若く、此傳を

假りて、著者が佛蘭の念を寓せたる者ならん。且

つ余は亦此傳の研究によりて、朔漠方略、藩部要

略が、最も確實なる史料を採集し、編次したる者

なることを知り、聖武記がブルルジャーと同じく傳聞に取る所多くして、史實に於ては精確を缺

く恐あるも、而かも當時人心の情偽に觸るゝ所あ
機を相て、更に秦邊紀略中に包有せる他の西夷史
料を研究せば、再び正に同好の士に就かんとす。

京 都 南 蠻 寺 興 廢 考

文學博士 新 村 出

一
南蠻寺といふ稱呼は一般に吉利支丹寺院の意味
でも用ゐられてゐるが、主として信長の保護によ
つて建立され秀吉の禁教の結果破壊された京都の
吉利支丹大寺院の特稱になつてゐる。いづれにせ
よ徳川時代中期このかたの追稱であつて、寛永以
前には見かけぬ所である。天文二十一年大内氏か
ら建立の許可を得たとある山口の大道寺、永祿七
年平戸に創建された天門寺などの寺號は、西土の
史にも載つて疑はれぬが、本邦の稗史野乘に傳は
つてゐる永祿寺とか大成寺とかいふ名は、根據の
なきもので、後人が隨意に造つた稱呼である。中
にも大成寺とあるは「大成寺」と古い本にあつた
のを、送假名が除かれて寺號のやうに誤解された
のである。この筆法は古い記録にはさらに多いの
で、例へば當代記に「伴天連師匠寺」だの「西京寺」
だのと見えてゐるもの、一は伴天連師匠即ち宣教
師の住寺の意味、他は西の京の寺といふ意に外な
らぬ。天主寺とあるのなどは天主の寺の汎稱であ
つて、亦特稱ではない。要するに布教當時にあつ
ては、信徒の間には、宣教師の定めた洋名の寺號
が通用したに相違ないが、一般世間には傳はらず